

## 美的判断における自己触発

— 「心の哲学」から見たカントの感情論

杉山卓史 (京都大学)

---

心の能力を「知・情・意」の三作用からなるとする考えは、いつ成立したのだろうか。一義的な回答を与えるのは困難であるが、18世紀末のカントの三批判書が内容的にこの三作用に対応することは確実である。その意味で、「(快および不快の感)情」を扱う『判断力批判』は「感情の哲学」の古典たりうるものであるが、「感情」を認識の対象としても道徳行為の動機としても排除した先行二『批判』に引きずられてか、「感情の哲学」の系譜において彼の影は非常に薄い。他方、上述の通り「心」の一部にほかならない「感情」は、近年では主に分析哲学とりわけ「心の哲学」において(認知科学の知見を援用しつつ)研究されてきた。注目すべきは、1980年代以降『純粹理性批判』を「心の哲学」として読み直す試みが次々となされてきたことである。それによって再構成されたカントの「心の哲学」は、哲学史の一コマとしてのみならず今日のみならず今日の目から見ても魅力的なものと評価され、カントは「現代認知科学の知的祖父」とまで称されるようになる。しかし、その成果は「(自己)意識」概念までにとどまり、「感情」にまでは及んでいないというのが現状であるように思われる。以上の二重の背景から、本報告はカントの「感情」概念を再考する。

そのために本報告では、カントが『判断力批判』冒頭(第一節第一段)において、趣味判断においては「主観が表象によって触発されるように自分自身を感じている」と述べていることに注目する。近年、この「主観が自分自身を感じている(*das Subjekt fühlt sich selbst*)」という句に注目し、これを「私は考える(*ich denke*)」という形式を取る超越論的統覚と対比することによって、前世紀末以降進展しつつある美学の「感性論的転回」——「感性」という語源への回帰——へのカントの寄与を積極的に評価しようとする見方が現れている。しかし、ここに「表象によって触発(*affizieren*)されるように」という句が(さりげなく)挿入されていることは、これまで看過されてきたのではないか。ここでカントは、趣味判断を「触発」と並行させつつ語っている。もちろん、『純粹理性批判』において「感性」が「われわれを対象によって触発される仕方で表象を得る能力(受容性)」と定義されていることに鑑みるならば、驚くにはあたらないであろう(だからこそ趣味判断は「感性的(*ästhetisch*)」判断なのである)。しかし、それが「自分自身を感じる」と並置されることは、『純粹理性批判』には見られない観点であり、同書においてその「自己意識」論を支えるために展開されるのとは異なる——いわば「もう一つの」——「自己触発」論と呼んでよいであろう。

以上の洞察を踏まえ、本報告ではカントの「感情」概念を「自己触発」という観点から再構成し、その射程を示したい。